

初期ブルーノ・ムナーリと写真：『ムナーリの写真記事』を中心に

太田岳人（日本学術振興会）

本発表の目的は、イタリアのデザイナー・芸術家であるブルーノ・ムナーリ（1907-1998）が第二次世界大戦中に発した著作のうちの一冊である『ムナーリの写真記事：トリュフの島から取り違えまで』（*Fotocronache di Munari: dall'isola dei tartufi al qui pro quo*, Gruppo Editoriale Domus, 1944／以下『写真記事』と略）の内容の分析を通じて、大戦後に世界的な評価を得ることになる、彼の活動と表現の形成の背景について考察することである。

『写真記事』の発表以前から、ムナーリと写真表現の間には深いつながりが存在する。彼が芸術の世界に入るきっかけとなり、1927年頃から10年近くにわたって参加し続けた未来派には、写真を専門とする芸術家は少なかったものの、運動の初期には「フォトディナミズモ」の実験を提唱したアントン・ジュリオ・ブラガーリアのような人物を有していた。一方ムナーリは、1930年代には生業として雑誌や書籍のイラストレーションやグラフィック・デザインを主に手掛けており、その過程で自身の素材として写真を扱うことに熟練していく。写真を用いたこの時代の彼の仕事には、構成主義やシュルレアリスムといったイタリア国外の国際的な前衛芸術運動で開花した、フォトモンタージュなどの成果を積極的に参照した形跡を見出すことが可能である。

ムナーリは1939年から1943年にかけて、モンダドーリ社が創刊した雑誌『テンポ』の初代アート・ディレクター兼寄稿者として起用された。この時、同誌に彼が掲載した十篇ほどの文章と写真による記事が『写真記事』の元になっている。アメリカの『ライフ』誌をモデルに創刊された『テンポ』は、写真の効果を最大限に活用したイタリア最初のグラビア雑誌の一つであったが、当然ながらこの時期においては、ファシズム政権の偉大さと大戦の勝利を訴える政府宣伝の機能も大いに担わされていた。しかしムナーリの『写真記事』は写真のイメージによる力に言及しつつも、その表現を体制の宣伝活動と結びつけて論じることはない。水車や浚渫機という事物や、様々な芸術潮流といった、個人の語りた主題に対してのみ、芸術家は自他の写真を用いて記事＝表現を制作する。さらにそうした記事の本文、写真のキャプション、写真の掲載の仕方の多くは、滑稽な効果を意図され、読者の笑いを誘うものであった。一種ダダ的なものすら感じさせる『写真報道』のページ構成は、同時期の『ムナーリの機械』（*Le Macchine di Munari*, Einaudi, 1942）にも通ずるだけでなく、当時のイタリア社会で量産され続けていた、当時の宣伝的報道における写真の空虚さを示唆するものにもなっている。

こうした点への考察を通じて、『写真記事』からは、イタリアという枠を超えて大戦後に飛躍するムナーリの創意と視野が、どのような環境の影響を受けて形成されていったかという経緯が浮かび上がるのである。